

谷崎潤一郎記念館と倚松庵

松村 茂治

芦屋にある谷崎潤一郎記念館と、そこからさほど遠くない所にある潤一郎のかつての住まいであり、「細雪」の舞台ともなった倚松庵(いししょうあん)には、阪神方面に出かけることがあったら、一度寄ってみたいと思っていた。大阪にも神戸にも何度も行っているにも拘わらず、なかなかその機会がなかったのは、どちらの施設も大阪あるいは神戸の中心地からは乗り物を利用しないと行けないので、何かのついでに寄るといふ訳にはいかな

いからだ。この秋(二〇一四年)、所用で新神戸に滞在していた折り、時間に少し余裕ができたのと、連れが誰か今のように激しく軋み合わない時分であった」という書き出しの一文に魅了されてしまった。当時、賢くなりたいと思つて日々励んでいた高校生には、まったく理解できていなかったところである。この時代から、計算高く振る舞つたり、人の先を越したり、巧みに自分を主張したりするなどの、近代的「賢さ」を尊重する世相がはびこり始めていたのだろう。鋭敏な作家の目は、今に続くそうした時代の流れの中で失われつつあるものこのとをしっかりと見つめていたのだ。

読みふけたのを覚えてい

読みふけたのを覚えてい

読みふけたのを覚えてい

読みふけたのを覚えてい

もいかなかったこともあつて、足を向けてみようと思つたのである。

初めて手にした谷崎作品は、「春琴抄」だったろうか。「刺青」だったろうか。いずれも、高校生向きの谷崎入門書として紹介されていたと思うが、そもそも谷崎作品を読もうと思つたのは、彼が耽美派の作家と言われ、その作品が官能的と評されていたからである。「刺青」の中で、彫師の針が女の柔肌を突き刺し、その背中に次第に蜘蛛の絵を浮き上がらせていく場面を、固唾を呑んで

かが今のように激しく軋み合わない時分であった」という書き出しの一文に魅了されてしまった。当時、賢くなりたいと思つて日々励んでいた高校生には、まったく理解できていなかったところである。この時代から、計算高く振る舞つたり、人の先を越したり、巧みに自分を主張したりするなどの、近代的「賢さ」を尊重する世相がはびこり始めていたのだろう。鋭敏な作家の目は、今に続くそうした時代の流れの中で失われつつあるものこのとをしっかりと見つめていたのだ。

記念館の最寄り駅は、阪神線で三宮から十駅ほど大阪方面に行った芦屋駅である。家を出る前から何度も地図を確認して、迷うほどの所ではないということは分かっていたので、地図も持たずに歩き始めたのである。若い頃は、方向感覚には自信をもっていたが、近頃は、今しがた覚えたばかりのことを忘れてしまつたり、覚えていても肝心なときに思い出せなかったり、取り分け最近、頑強な思い込みがあつて、日時を間違えたり、約束とは別の場所に行つてしまつたりすることが少なくない。地図を持たずに歩き始めたということ、そういう最近の自分自身のことも忘れていたということである。案の定、

記念館に近づいたところで道を見失い、少し遠回りをする羽目になった。

あと一つ角を曲がれば目的地という所まで戻ってきたとき、周囲の景観には馴染まないその建物が姿を現したのである。はじめは、それが記念館かと思ったのだが、すぐに、陰影を賛美する作家の建物としては似つかわしくないと思ひ直したのだった。記念館でないとするれば、大ききから言つて、他の公共施設に違いない……。

建物は、明るい茶色・・・というよりオレンジ色に近い茶系の、堂々としたレンガ造りの三階建のビルである。そのとき私が目にしていたのはビルの裏手に当る所で、建物と同系色の塀に隣接した北側のスペースは、車が十台以上も停まれる広い駐車場になっている。そこには、何の表示もなく、車一台停まっつてはいないが、コンクリートで舗装され、白線が引かれ、車止めもあるので、駐車場であることは間違いない。はじめ、その広さから公施設を訪れた人が車を停めるためのスペースかと思つたのだが、それにはやや違和感がある。そこが駐車場であることを示す何の表示もない上に、駐車場から敷地へ入るための入り口もないのである。もちろん、駐車場から一度道路へ出て、敷地へは正面から入るといふことも

考えられるが、それにしても、私の感じた違和感は解消しない。それは、駐車場から直接敷地に入れないからというより、駐車場と敷地を隔てている塀が、丈も高く頑強そうで、人の接近を頑なに拒んでいるように見えたからである。それなら、ビルと駐車場は別の人の所有物かと言え、決してそのようには思えない。そう考えるのは、敷地と駐車場が、三方を道路で囲まれた同じ区画内にあることにもよるが、それだけではない。はっきりとした理由は分からないのだが、そこが、不特定多数の人が使用することを想定しているようには見えなかったからである。

駐車場の角を左折したところで、正面に「谷崎潤一郎記念館」の看板を見つけ、ほつとしたのであるが、三階建の西側の塀に沿って歩くうち、この建物に対する違和感が益々強まってくるのを覚える。ビルを囲む塀も同系色の明るい茶色で、柔らかい印象を与えるが、その印象とは裏腹に、造りは、どうしてそれほどまでに・・・と思うほど、頑丈そう。それは、ブロックを積み重ねたちやちな代物ではなく、おそらく鉄筋コンクリート製、しかも、かなり厚手に出来ていて、大型トラックをぶついたら、車の方が大破すること間違いない。その上、丈

が高く、外からは中の様子は全くうかがい知ることにはできない。ビルトイン式のガレージにはシャッターが下りていたが、それも頑丈そうで、わが家のペラペラのアルミ製のものとは格が違つて見た。そして、違和感を決定づけたのは、出入り口に設置されていた監視カメラの存在である。

記念館の入り口を探して、もう一度左折して、建物の南側の石垣に沿って歩くことになった。大人の手で一抱えほどもある大きな石を何段にも積み重ねてコンクリートで固めた上に鋼鉄製のフェンスが埋め込まれている。

その石垣の先に、屋根つきの正面入り口と通用門が見えたが、いずれも堅く閉ざされていて、ここにも監視カメラが設置されている。南面は全体に和風の造りになっているが、まさに水も漏らさぬ鉄壁の護り・・・この門が開かれるのは、一体どんなときなのだろうと想像を逞しくしてしまふ。その高いフェンス越しに、手入れの行きとどいた木々が枝を伸ばし、その奥に三階建ビルの正面上部が見えている。裏手から見たときには、公共施設かもしれないと思つたが、ゆつたりとした庭やかなりお金のかかったその建物は、名の通つた会社の研修施設と見えなくもない。しかし、贅沢そうな造り、塀の頑強さ、

出入り口に設置された監視カメラ等を総合して考えると、公共施設でないことはもちろん、一般の会社の研修施設でもない第三の可能性を想定する必要があるそうだった。もつとも、その第三世界では、その世界特有の研修的な使われ方をすることもあると思われる。何しろ、ここは芦屋なのだから！

この建物の印象があまりにも強烈だったので、そちらにばかり気を取られていたからだろう、少し気を利かせば容易に気づくはずの記念館の入口を見過ごしてしまつていた。公共施設でもなく研修施設でもない建物の前を戻つて、ようやく谷崎潤一郎記念館の入口にたどり着くことができたのである。

記念館は和風の造りで、切妻型の屋根を載せた棟門をくぐるとすぐに玄関である。入ると左手に受付があり、そこから奥のガラス戸越しに、周囲を丈の低い松や楓などの植え込みで囲まれた池が見えていた。帰つてから、そこで買い求めた図録を見てみると、潤一郎は一時京都の下鴨に居を構え、そこを「潺湲亭（せんかんてい）」と呼んでいたとあり、その庭園から母屋を撮つた写真が掲載されていた。記念館とよく似た造りだと思つて、

説明文をよく読んでみると、記念館は、その潺湲亭を模して造られたとのことである。

展示室は、受付の向かい側の一室だけだという。「大谷崎」の記念館にしては、何とも寂しい感じがするが、展示室を巡りながら、ここは、「谷崎記念館」というより「細雪記念館」と呼ぶのが相応しいのではないかと思うに至った。なぜなら、展示室に掲げられているのは、三番目の夫人となった松子をはじめとする「細雪」のモデルの四姉妹を中心にした写真と阪神での生活の思い出であり、そこに流れているのは「細雪」の冒頭で、主人公たちが出かけようとしていたコンサートに出演していたピアノニストの奏でるピアノ曲、展示されている自筆原稿は「細雪」の、かの有名な書き出しの一枚、それに部屋を片隅で放映されているのは、市川崑が監督し、岸恵子、佐久間良子、吉永小百合、古手川祐子が四姉妹を演じた映画のDVD映像、それに「細雪」の中でも描かれている昭和十三年に起きた阪神大水害の報道映像といった具合に、まさに「細雪」尽くしなのである。

明治十九年、東京日本橋生まれの潤一郎は、大正十二年の関東大震災を機に、関西に移りそこで創作活動を続けたことはよく知られている。亡くなったのが昭和四十

年ということだから、作家としての円熟期から晩年までを関西で過ごしたことになる（ただし、芦屋で過ごしたのはそのうちの数年間である）。

潤一郎については、東京生まれ、一高、帝大卒、「三田文学」で荷風に認められたことなどから、そして、「刺青」や「幫間」、「秘密」、「少年」など、初期の印象的な短編がみな浅草近辺を舞台にしていたことなどから、学生時代の私は、彼を東京の作家と思い込んでいたが、「細雪」を筆頭に、「卍」、「鍵」など代表作の多くが、関西を舞台にした作品だった（考えてみれば、「春琴抄」の舞台も大阪だった）。

わざわざ記念館までやって来なくとも、その気になれば、松子をはじめとする四姉妹についても、松子の連れ子の恵美子と清治、清治の嫁の千萬子、二番目の夫人となった丁未子（とみこ）たちのことについても知ることができたろうが、こうしたところがあるおかげで、私のような素人でも、作家の人間関係や執筆時の社会背景について短時間のうちに知ることができ、作家とその作品を身近に感じることができるのである。

そして、改めて谷崎潤一郎は、女性が・・・賢い、美しい女性が好きであったということに気づくのである。

単に「好き」という言葉では言い表せないほど、女性がいなくてはならなかったのだと思う。女性に関するこだわりが強かったと言うのが当たっている。ときには、その女性の魅力を手元に引き出し、あるいは、好みの女性とのやり取りの中に巧に自分を位置づけ、そして昇華させ、それを作品に定着させていった。図録によれば、同時並行的に関係が続いていたこともあるようだ。いや、そういうことがしばしばだった・・・いやいや、そういう人生だったと言うべきだろう。

例えば、潤一郎が最初の妻（千代）と結婚したのは、大正四年、潤一郎が二十九歳、千代が二十歳のときである。しかしながら、結婚直後から、潤一郎は、妻の千代には飽き足らず、妹のせい子に強く惹かれていった。いや、惹かれていったというより、のめり込んでいったと言うべきだろう。しまいには、千代を邪険に扱い、せい子との結婚を考えるまでになっていたとのことである。

千代の年齢から推測して、知り合った頃のせい子は、十代だったはずである。後に、せい子をモデルにした小説「痴人の愛」を発表するが、そこに描かれている作者の分身と思われる譲治は二十八歳、せい子をモデルとしたナオミは十五歳という設定になっている。譲治は、幼い

ナオミを手元に置き、自分好みの女性に育てようとするが、次第にその肉体に溺れ、破滅に向かって突き進んで行くというのが、そのストーリーである。

小説のナオミは、小柄ではあるが、色白で、彫の深い西洋風の顔立ち、均整のとれた身体の持ち主として描かれている。図録にあるせい子の水着姿は、そのエキゾチックな容貌とともに、小説の中で鎌倉へ海水浴に出かけるナオミの姿を彷彿とさせる。

好みの女性にめぐり合い、入れ込んでいく当人は幸せだろうが、当然それは周囲にさまざまな波紋を引き起こすことになる。一番の影響を被ったのが親友の佐藤春夫ではなかったか。春夫は、かなり早い時期から、この問題に介入していたようだ。そして、潤一郎、千代、せい子の三角関係に春夫が加わった四角関係は、潤一郎が千代を春夫に譲ることで落ち着くかに見えたが、土壇場になって潤一郎の翻意に遭い、大正十年、潤一郎と春夫とは絶交状態になる（小田原事件）。二人は、大正十五年に和解をするが、潤一郎の夫婦関係はまだまだ波乱の中にあつた。

そうした中、昭和二年、潤一郎は、生涯の伴侶となる女性（根津松子）と運命的な出会いをすることになるが、

この時点では両人も家庭を持つ身であり、即結婚という訳にはいかなかった。

昭和五年、ようやく千代との間に離婚が成立し、千代は春夫の妻となった（妻讓渡問題）。残された記録から松子に対する潤一郎の思いは並大抵のものではなかったことが分かるし、結果的に、松子は伴侶という存在を超えて、彼の創作にとつて必要不可欠な存在となるわけで、一足飛びに結婚へと向かうかと思いきや、奇妙なワンステップが入るのである。

千代と離婚して半年もたたない昭和六年、潤一郎は、仕事を通じて知り合った古川丁未子と、婚約を交わし、その半年後には、結婚することになる。互いに身軽な身の上なので、何をしようと自由だが、松子という重要人物を知った後だけに、何とも解せないところである。人妻ということで、先方に対する遠慮があったのだろうか、社会の目を考えてのことだろうか。いずれにしろ、千代に対する扱いとは雲泥の差である。そうしたところに潤一郎らしさが表れているということなのか。この二度目の結婚は、潤一郎四十五歳、丁未子二十三歳のときであった。丁未子について、図録には、「・・・恵まれた美貌の持ち主」との一文があり、添付されているスナッ

プ写真の小さいのが何とも残念だが、それでも、モダンなショートヘアの聡明な印象を与える美人であることは十分に伝わってくる。せい子及び後述する千萬子とは別タイプのモダン女性と見えるのだが・・・。

昭和七年、新しい動きは、松子の方からあった。家庭的に不安定になった松子が、潤一郎を頼りにしてきたのである。すると、あるうことか、潤一郎は、丁未子を伴って、松子たちの家の隣に転居するのである。そして、昭和八年には、丁未子とは別居し、松子と同棲状態になる・・・いや逆だったか、松子との同棲が先で、その結果の別居だったのかもしれない。

昭和九年、丁未子と離婚し、昭和十年、晴れて松子と結婚することになる。このとき潤一郎は四十九歳である。結婚に際しては、松子の二人の妹と松子の連れ子（恵美子）と同居することになり、部屋数の多い家を求めて探し当てたのが、現在「倚松庵」として保存されている建物であった。

松子の連れ子である恵美子は、後に、能楽師の観世栄男に嫁ぐことになるが、この娘が谷崎作品にどのような影響を与えたのかについての情報は持っていない。写真を見る限り、母親の松子が、容貌からして純日本的な、

カメラの角度によっては、竹久夢二の描く女性とよく似た和風美人なのに対して、娘の恵美子は、洋装の似合う目鼻立ちのはっきりした子で、外見的にはせい子に似ているような気がするのだが、後述の「谷崎潤一郎」渡辺千萬子「往復書簡」には、潤一郎は恵美子のことを全く認めていない旨の記述が出てくる。文豪の琴線に触れるには、外見の美しさだけでは足りないということなのだろう。

松子のもう一人の子ども（清治）は、早くに夫を亡くしていた松子の妹（重子）の養子となり、高名な日本画家・橋本閑雪の孫（千萬子・ちまこ）を嫁に迎え、京都の潤一郎邸（潺湲亭）と同じ敷地内に住むことになる（昭和二十年頃からは、潤一郎は、度重なる疎開を経て、京都に居を構えている）。前述のように、千萬子も、せい子や恵美子の系列に属する洋風美人である。晩年の傑作「瘋癲老人日記」のヒロイン颯子は、彼女がモデルになっっているというのは、今回の旅で初めて知ったことである。この本も先日購入し、さっそく読んでみた。颯子が魅力的に描かれているのは当然として、彼女の前にいくと「老人」が何とも可愛らしくなってしまうのが印象的だった。

「瘋癲老人日記」の文庫本を購入したときに、千萬子との往復書簡も文庫本になっているのを知って、併せて買い求めてきた。四百ページ近い文庫本だから、一体どれほどの書簡のやりとりがあったのだろうか。手紙の日付を見ると、昭和三十年代のやりとりがほとんどなので、潤一郎七十年代、千萬子二十代の頃のものである。

往復書簡とはなっているが、読んでみるとほとんどは潤一郎からの一方的な恋文のようで、千萬子はそれを真剣に受け止め必死に凌いでいるといった印象を受ける。ページを繰るうち、いつの間にか書簡体の恋愛小説を読んでいるような心地になっていることに気づいた。お互いに連れ合いのある身である。書かれていることについては、こんなことまで書いてしまつて大丈夫だろうかと心配し、書かれていないところについては、その先二人はどこまでいったのだろうか・・・と想像力を逞しくして読んだ次第である。

書簡と小説ということは、事実と虚構、モデルと作品いうことだから、それぞれ独立したものとして受け止めるべきだが、二つを立て続けに読んだこともあって、両者の境界がはっきりしない。小説には颯子に三百万円のキヤッツアイを買つてやるという件が出てくるが、千萬

子への手紙には「僕は君のためならどんな高価なものでも高価とは思いません」と書いています。文豪が好んで描くところのマゾヒスティックな男たちのように、潤一郎自身が彼女の足元にひれ伏すことに喜びを感じていたように読めてならない。それにしても、携帯とメールの時代なら、家族の者に知られることなく、秘密のやり取りを続けることも可能だが、電話と手紙の時代のことなので、松子が二人のやり取りをどのように受け止めていたのか、つまり、千萬子を自分に、自分を千代や丁未子に置き換えて考えるようなことはなかったらうかと、つい想像してしまうのである。

平成十三年、書簡集の出版に当たって、千萬子は、「毎日のようにこういう手紙を受け取っどう感じたのか、今思い返してみてもはつきりとは解りません。勿論、嬉しかったには違いありませんが、愛されているなどとは感じもせず、有頂天にもならず、私なりに極めて冷静に受け止めていたと思います。ただ、谷崎が私のまわりに何か魔法の網のようなものをかけ始めたのは感じました。・・・」と書いている。これは、はつきりとした愛の、いや、愛を受け止める告白と思うのだが・・・。

手紙であれあとがきであれ、これだけの文章を書ける「女」！・・・それは私が生まれた時から今日が日まで片時も止まず私を導いて来たところの、・・・いや恐らくは最後の息を引き取る日まで導いて行くであろうところの、たった一つの光なのだ。(略)

ここでいう「白」について、主人公は、この文章に先立つ部分で、「つまり、『白』と云うのは私の生命が永久に焦がれ慕って已まないところの、或る完全な美の標的、・・・まあ、強いて名づければそうでも云うより外はなからう」と述べている。

この作品が発表されたのは、大正十二年のことである。最初の妻千代との関係は破綻していたが、松子との邂逅までにはあと五年、千萬子との出会いはさらにその二十年後のことである。潤一郎は、自身の「白」となるべき女の出現を予見していた、いや、そういう存在がなければ生きていけなかったということになるのだろうか。

記念館にいたのは一時間ほどだったろうか。それでも展示室を二回も回ることができたし、椅子に座ってゆっくりと、阪神大水のDVDを見ることもできた。こちらへ来る新幹線の中で潤一郎の短編集を読んできてしまっ

た。渡辺千萬子という女性の才能の豊かさに驚かされたが、文章だけではなく、生活の隅々にまでわたるセンスの良さに気付く、あるいはそれを育てた(?)谷崎潤一郎という人間の目の確かさに、改めて驚かされた。二人は互いに刺激し合い、高めあったということがよく分かる書簡集である。

この文章を書いている最中に読んでいた短編「アヴェ・マリア」^⑤に、面白い一節を見つけた。この短編は、取り立てて小説らしい展開はなく、主人公の一方的な独白(書簡)という形をとって進められるが、終わりに近い所で、主人公の口を借りて、恐らく潤一郎自身の女性観というか、彼にとつての女性の意味が語られる部分がある。

お前はいつぞや私のことを浮気者だと云ったっけね、少しきれいな女を見ると直ぐに惚れる、こんな惚れっぼい男はないって。・・・成る程それはたしかにそうだ。(略)そう、私はいつの間にか多くの女の中にはかり「白」を見出すようになった。成人するにしたがって私の「白」は「女」と全く同一になった。あゝ

たことに気づいて、帰りがけに受付で「人魚の嘆き・魔術師」の文庫本を買い、次の目的地に向かったのである。まずは駅へ出ようと、記念館の北側にある、例の明るい茶色の塀を右手に見ながら一区画行った所に、手入れの行き届いた庭のある豪邸があることに気がついた。記念館に入る前、この家の前を通りながら、特に気に留めなかったのは、その灰色がかった塀も二階建ての建物も、周囲に馴染んでいて違和感がなかったからであるが、近づいてよく見ると、門構えからエントランス周囲、庭の様子など、周囲の家とはやや異質で、それを決定的にしているのが、ガレージや出入り口に取り付けられた監視カメラの存在である。門から中を窺うことはできるが、近づきたい印象は免れない。今通り過ぎてきた茶色の三階建ビルとこの家には、極めて近い関係にある人、はつきり言って同業種の人が住んでいるのだろうと想像した次第である。

芦屋駅から阪神線で三宮方面に三駅ほど戻った所が魚崎駅である。倚松庵はそこから歩いて十分ほどの所にあるはずだ。潤一郎たちが住んでいたころの倚松庵は、今あるところから、百五十メートルほど南に寄った所に

あった。平成二年、道路の拡張工事に伴って、現在地に移築されたのだが、今になってみると、それが幸いした。移築に際して耐震補強をされたおかげで、平成七年の阪神淡路大震災での倒壊を免れたのである。ここから数キロ北に行った所（岡本梅ヶ谷）にあったもう一つの住まいは、震災で完全に倒壊してしまっただけのことである。移築後の建物は、大通りに面しているはずだし、昔ならどこにでも見られたであろうが、今や目にするのも珍しくなった伝統的和風建築の木造二階建ての建物である。見落とすことはないだろうと思っただけで、それらしい建物はすぐに見つけることができたのだが、少し様子がおかしい。門がしつかり閉まっている上に人の気配もなく、庭の木の間越しに見える二階の窓も、雨戸が固く閉ざされていて、営業中とは思えない。だからと言って、開館時間が過ぎた訳でもないだろう、まだ午後二時前である。

閉ざされた門の脇を見ると、そこには監視カメラの代わりに小さな看板が掛っていて、「土曜日・日曜日・・・・」とある。「今日は、金曜日のはずだが・・・」と思いつつ、いながらよく読むと、それは休館日ではなく開館日を知らせるものであった。来る前に寄った記念館に掲示され

ていた「倚松庵」の案内にも、「土曜日・日曜日・・・・」の文言があり、何の疑いもなく、「ああ良かった、今日は金曜日だ・・・」と勝手に読みをして、ここまで足を運んだのだ。先にも述べたように、この種の思い込みがすこぶる多くなったと思うこの頃である。無駄足を踏んだと言えそうになるが、場所の確認ができた訳だし、外からその佇まいを眺めることは出来たので、よしとすべきだろう。翌日は間違いなく土曜日、仕事に差し障りがないよう、朝一番で来ることにして、東海道線の住吉駅に向かったのである。

「倚松庵」の開館は十時だから、新神戸のホテルを九時過ぎに出て十分に余裕がある。前日とは逆コースをたどり、三宮から東海道線を使い、住吉駅で降りたのである。前の日のことがあったので、多少の不安を抱えながら門の前まで来てみると、一人の婦人が庭や街路の植え込みに水を遣っている。「昨日、間違えて来てしまつて・・・」と告げると、「申し訳なかったですね、土曜日と日曜日だけなので・・・」との返事が返ってきた。門に入って右手に少し登った所が、この旧住人が使っていた玄関で、そこが来館者の入り口にもなってい

る。玄関を上がった所に受付のような小窓があったので、入館料を払おうとすると、無料だという。どういう組織が運営し、日々の管理をどうしているか定かではないが、土・日のみの開館ということは、営業ペースでやっていることではなく、心ある人たちがボランティアでやっているということなのか。奇特な人たちと思つたが、谷崎没後半世紀、はたして入館料を払ってどれだけの人が来るか・・・ということなのかもしれない。

玄関を上がると左手が洋風の応接間である。開きのドアの中央上部には、グレーの金属で縁取りをされた青いステンドグラス（？）の小さな飾り窓がついている。入ると右手にマントルピースがあり、左手は床から天井までの造りつけの本棚になっていて、今までに出版されたさまざまな種類の谷崎作品が収められているけれど、これは彼の生前からあったものだろうか、来館者用に設えたものだろうか。この書棚を見ているときに、次の来館者がやってきた。私と同年輩の男性だった。

この部屋で、何よりも私の目を引いたのは、庭に出るための大きな引き違いのガラス戸と部屋の南面と東面から明りを取り入れるために造られた、上下にスライドさせて開閉する窓である。もちろんアルミサッシなどでは

なく正真正銘の木製で、いずれにも十字に棧が入っている。手で感触を確かめながら、昨年立て替えた我が家にもこういう窓が欲しかったなあ・・・と思わずにはいらなかった。

その部屋の主要光源となっている照明は、もともとそこにあつたものなのだろうか。大きな照明器具であるが、部屋に面した部分は焦げ茶色のカバーで覆われ、明りは天井に反射するようになっていて、完璧な間接照明である。改めて「陰翳礼賛」の言葉が脳裏に浮かぶ。応接間から庭に出てみると、建物の南側を見渡すことができ、きれいな木目が浮き出た落ち着いた木造建築が柔らかな印象を与えている。

応接間の続きは食堂。ここで、潤一郎は姉妹たちと食事していたのだ。小さめだが頑丈そうなテーブルと椅子が整えられている。この部屋から水回りへとつながるドアにも、隣の部屋と同じ青ガラスの小さな窓がついている。このドアを使って台所との行き来をしていたのだろうが、実際に動いてみると、二階に上がるための階段を迂回しなければならず、いささか不便ではなかったろうかと感じた。

食堂の奥に続いている、床の間・板の間つきの四畳半

は、潤一郎の書齋だったろうか、姉妹の誰かの居室だったのだろうか。記念館で手に入れた図録に載っている、外国人の写真家の手になる「陰影礼賛」を実証した実験的な写真は、この部屋で撮られたものである。キャプションには、「障子は光を集めるのと同時に遮断するという両義性がある・・・」とあり、はつとさせられる。写真は、南側の縁側に面した障子と、西に面した一畳ほどの板の間の掃き出しの障子を閉め、早朝、午前、午後、夕方と、太陽の動きとともに微妙に変化する光の様子を収めている。この部屋の縁側からも庭に出られるようになっていている。縁側の突きあたりに、三尺幅の流しがあって、この部屋の使いやすさが偲ばれた。

トイレ、風呂場、台所と一階の水回りを見て、二階へ上がるうとしていたところで、まさにドヤドヤと、十人ほどの団体の襲撃を受けることとなった。先に二階を見てしまった方がいいだろうかと思案をしていると、敵はかなりの速攻戦略を取っているようで、庭に出たかと思うと、水回りを經由して、先頭部隊は二階まで進撃しているようだ。どうしたものかと躊躇していると一団のどこからか、「四十分にバス集合です・・・」という声が聞こえて来た。十分もすれば静かになることが分かった

ので、無駄な抵抗はせず、応接間に戻ってソファアに腰かけ、そこに置いてあった冊子を手に取ったのである。市販の雑誌だったのか、記念館や倚松庵を管理する所が出している冊子だったのか、確認してこなかったのだが、そこに掲載されていた一枚の写真に、思いがけない人物・・・私が一度、言葉を交わしたことがある人物の姿が写っていたのである。

写真は、潤一郎と最初の妻（千代）との間に生まれた娘（鮎子）の結婚式（昭和十四年）の際に撮られたものである。すでに千代は、潤一郎の下を離れ、佐藤春夫の妻になっている（妻譲渡事件は昭和五年）。娘の鮎子も一緒だった。そして、鮎子の夫となったのは、春夫の甥（姉の子）竹田龍児ということだから、何ともややこしい家族関係、親戚関係であったことが分かる。この結婚の媒酌の労をとったのは泉鏡花夫妻で、その姿も写真に認めることができる。潤一郎と春夫は、「事件」を巡って一時、絶交状態になっていたというが、潤一郎の離婚そして春夫の結婚が決まった時には、二人の関係は旧に復していた。

そもそも二人は、互いに認め合った大親友で、大正七

年に発表されたファンタジックな短編「魚の李太白」には、春夫のことを表面的には揶揄しながらも、ほのぼのとさせる件がある。それは、自分は李太白の生まれ変わりだと称する縮緬で出来た鯛が、佐藤春夫の「李太白」を読み、李太白は錦糸魚になったと主張する娘に、自分こそが李太白であると抗弁する場面である。

「は、あ、成るほどわかりました。お嬢様ではない若奥様は、きつとあの、佐藤春夫と云う男の書いた『李太白』をお読み遊ばしたんですな。それである中に書いてある話を、信用していらっしやるんですね。」

「ええそうよ、あたしはつい此の間、あの話を読んだばかりなのよ。」（略）

「いや、あの男の書いた話は、あれはみんな好い加減な出鱈目でございますよ。あの男の云う事なんぞを、うっかり信用なすつてはいけません。（略）綿糸魚になったの、星になったのと、あんな嘘を真に受けたら其れこそ大変でございます。（略）いや、あの男は自分が嘘つきなのでなく、きつと錦糸魚に欺されたのでございます。（略）」

また、大正八年初出の「秦淮の夜」では、夜の美女を探し求めて、迷路のような南京の街路を人力車で走り回るうち、「太白遺風」の看板を掲げた商店（おそらく酒屋であろう）を見つけ、「私は図らずも佐藤春夫の『李太白』を思い出した。この看板のことを佐藤に話したらきつと面白がるだろうと思った。」ともある。

大正七年、八年と言えば、小田原事件の前であり、潤一郎と千代の間は難しい状況になっていたが、春夫の間は、まだ良好であった。

ああ、話が横道に逸れてしまった。結婚式の写真の最後列に、春夫の姿があるのは、潤一郎の親友としてではないだろう。新婦鮎子の父親としてであろうか、新郎龍児の叔父としてであろうか・・・ひよつとしたら、一人三役ということだったのかもしれない。

この結婚式には、他にも文豪や文化人が参列していたが、大人たちに混じって緊張気味の目をカメラに向けている小学生くらいの少年がいて、そこには「佐藤方哉（まさや）」の名前が記されている。私が昔、言葉を交わしたことがある人物である。

私くらの年齢で心理学を学んできた者、中でも行動分析学に関わりを持ってきた者なら、当時慶應義塾大学で教鞭をとっていた佐藤方哉のことを知らない者はいなかった。日本人の手になる行動分析学の名著「行動理論への招待」（一九七六 大修館書店）は、今でも、研究室の書架に収まっている。「慶應の佐藤方哉は、文豪の佐藤春夫の息子なんだから・・・」といった噂は、私たち大学の学生の間にも伝わっていて、筑摩書房の「現代日本文学大系」第四十二巻「佐藤春夫集」の月報には、赤子の方哉を抱く春夫の写真が載っている。噂は容易に確かめることができた。しかし、その母親が、谷崎潤一郎の前の妻であり、世に名高い「妻譲渡事件」の当事者であったということは、今回、初めて知ったのである。

私が佐藤先生と言葉を交わしたのは、一度きりのことである。今から三十年以上も前、早稲田大学で学習理論とその応用に関する勉強会が開かれていて、定期的にそこに通っていたとき、確か一度だけ、佐藤先生が顔を出されたことがあった。勉強会を終え、皆で最寄り駅へ向かっているときに、たまたま横を歩くことになった先生に、恐る恐る「先生の所では、どんなテキストを使っ

勉強をしているのでしょうか？」と質問したのである。すると、「大学院では、カタニアのラーニングを読んでいる・・・」とのお返事が返ってきた。カタニアがどんな人物で、その著作がどんな内容のものか分からなかったが、学習研究の第一人者が使っている本ならぜひとも読まなくてはならないと、すぐに洋書の取次店に注文をして手に入れた。その本も書架に収まっている。ただし、折に触れて参照したことから、傷みが目立つ「行動理論への招待」とは違って、英文のこの本は新品同様、単語一つ調べた形跡がなく、「積読」で終わってしまったようだ。

（研究室にあるこの本には、当時の請求書が挟んであって、その日付は昭和五十六年四月八日となっている。佐藤先生と言葉を交わしたのは、その数か月前ということになる。）

佐藤先生は、「譲渡事件」の二年後、昭和七年の生まれである。鮎子の結婚式は昭和十四年だから、写真の先生は七歳、小学校一、二年生ということになる。研究会でお顔をお見かけしたすぐ後で、先生は親子ほども（いや、それ以上か）歳の違う現役の大学院生と結婚され、

私たちの間では、改めて有名になった。お相手の方は先生

の愛弟子、気鋭の行動分析学者ということで、その後も、研究会などでお姿をお見受けすることがあった。先生は、間もなく慶應義塾を定年退職され、ある私大の教授を経て、別の私大の学長をされていたと聞く。その在任中に、不運が先生を襲った。平成二十二年八月、京王線新宿駅で帰宅の電車を待っていたとき、近くにいた人がよるめいた拍子に、先生は電車待ちの列から押し出され、折悪しく入線してきた電車に接触して帰らぬ人となった。

応接室で、偶然にも方哉先生の幼いころの写真に接して、懐かしい思い出に浸っているうち、いつしか倚松庵には静寂が戻っていた。

応接間を出て急な階段を上がると、そこは二階で一歩広い部屋、東と南に、手摺のついた張り出しのある大きな窓を持った明るい八畳間で、この部屋は、潤一郎たちの寝室として使われていたとのことである。「細雪」は、音楽会に出かけるための身支度をしている姉妹の、この部屋でのやり取りで幕を開ける。

「こいさん、頼むわ・・・」

鏡の中で、廊下からうしろへ這入って来た妙子を見ると、自分で襟を塗らかけた刷毛を渡して、其の方は見ずに、目の前に映っている長襦袢姿の抜き衣紋の顔を他人の顔のように見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」と、幸子はきいた。

「幸子」のモデルは松子である。八畳間の片隅に置かれていた、カバーの掛けられた鏡台は、あの日、幸子で自分の姿を映していた鏡のはずだが、鏡台に並べて、年代物の桐の和箆筒と洋服ダンスが置かれていて、そこには、「調度品は復元ではない」との説明があった。復元でないということは、当時使っていたものではなく、肝心の鏡台も倚松庵とは縁もゆかりもないものということなのか。そうだとすると、何とも興ざめではあるが、ここに鏡台が置かれていなかったらもつと味気なかったかもしれない。

隣の部屋には、ショウケースが置かれ、原稿の複製や手紙などが納められていたが、あまり印象に残っていない。この部屋は、松子の妹の誰かが使っていたのではな

かったか。その西隣の四畳半には、座卓が置かれていた
ので、ここが潤一郎の仕事部屋だったのかもしれない。
二階であるにも拘わらず、庭に面した縁側の引き違いの
ガラス戸は、床から立ち上がっているの、落下防止の
ための棧が設えられている。今どき、このような造りは
あり得ないだろう。先にも書いたように、建物は平成に
なつて移築したもので、当時からこのように庭の木
々を目の高さかそれ以下に見るようにして、原稿に向
かっていたのかどうかは分からないが、もしもこんな感
じの部屋で過ごすことができたなら、私でも、名作の一
つくらい書けるのではないかという気がしてくるのである。

二階には、八畳間と六畳間と四畳半の三間がある。筆
筒や座卓など多少の調度品が置いてはあるものの、人が
生活しているわけではないので、広々とした感じはある。
ただし、この建物は、潤一郎と松子のスウィート・ホー
ムであったはずだが、松子の妹たちも同居していたので、
それほど広くはなかったのではないか。松子は潤一郎と
結婚する前、すでに既婚者であり、そのときから、妹た
ちは松子夫妻と同居していて、潤一郎はそれをそのまま
引き継ぎ形となった。それが結婚の条件だったのだろう。

谷崎潤一郎は、数度、ノーベル賞の候補にあげられた
が、結局それを手にすることはなかった。一説によると、
「細雪」は重要な候補作品であったが、ドラマチックな
展開のないところがマイナスに評価されたとのことであ
る。

この建物の中に身を置いてみると、いつ、かつての住
人たちが姿を現われてもおかしくないような気がしてく
る。辺りに誰もいなくなった夜間、あるいは、昼間でも、
前日のような休館日には、雨戸をしつかりと閉め切った
中で、登場人物たちは、物語の続きを演じているのでは
ないか、そんな気がしてくるのである。

この旅から帰って二週間後の十一月下旬に、もう一度
関西を訪れる機会があった。宿泊していた奈良のホテル
で、朝、部屋に配られていた新聞の第一面と社会面に、
見覚えのある潤一郎本人及び松子の写真とともに、未公
開の書簡が発見されたことを告げる記事が出ていた。書
簡は、潤一郎の遺族が保管していたもので、松子及びそ
の妹たちとの間で交わされたものらしく、潤一郎からの
ものが百八十通、松子たちからのものが百八通、合計二
百八十八通であるという。新聞には、「谷崎作品の読み

直しが必要だ」とする評論家のコメントと、これらの書
簡と既出の書簡を収録した書簡集が近々発行される旨の
知らせが出ていた。私にとって、このタイミングでのこ
の新聞記事は偶然のこととは思えない。評論家のコメン
トではないが、倚松庵のどこから、「マツムラさんと
言ったかね、高校生とは違った目で、今一度、私の作品
を読み直してみてもどうだろう」と言われているような
気がしてならないのである。

(補遺)

二〇一五年春のお彼岸、ここまで書き終えたところで、
さらにもう一度、関西に出かけることになった。目当て
の一つは、谷崎潤一郎が眠る京都鹿ヶ谷の法然院にお参
りをするのである。歩いて行くことも考えて、祇園に
宿を取ったのだが、予定していた日は朝からあいにくの
雨模様だった。宿に頼んで車を呼んでもらい、行き先を
告げると、運転手は当初、怪訝な反応を見せたが、強ま
る雨の中、こんな天気ならお寺は貸し切りだろうし、苔
が綺麗だろうと、慰めるように言い、狭い急な坂道をお
寺の真ん前まで行ってくれた。

妻を、山門の下に待たせて、墓地をしばらく歩いてみ

たが、墓所はすぐには見つからず、偶然、出会ったお寺
の関係者と思しき女性に、その在処を尋ねると、先ほど
まで行きつ戻りつしていた所から二、三段登った所の、
桜の木の下だとの返事が返ってきた。

言われた所まで戻って斜面を見上げてみると、すぐに
それらしい木を見つげることができた。桜の蕾はまだ堅
いようだった。垂れた枝の下、「寂」の字が彫られた大
きな自然石に、春の雨が降り注いでいた。

引用・参考文献

- 谷崎潤一郎―人と文学 武庫川女子大学出版部
- 潤一郎ラビリス 中公文庫
- 谷崎潤一郎Ⅱ渡辺千萬子 往復書簡 中公文庫
- 瘋癲老人日記 新潮文庫
- 現代日本文学大系 谷崎潤一郎集 筑摩書房
- 現代日本文学大系 佐藤春夫集 筑摩書房

(注) 「アヴェ・マリア」の「ヴェ」は、原作では、
「エ」の濁音で表示しているが、ここではワープロの
都合で「ヴェ」とした。